

第6回国際バーティシリウム菌シンポジウムに参加および発表

小池正徳

畜産環境科学科飼料作物科学講座

1. 目 的

第6回国際バーティシリウム菌シンポジウムに参加，発表

2. 期 間

1994年6月13日～6月28日

3. 場 所

イスラエル・ネゲブ（エンボケック）

4. 内 容

Verticillium 属菌はナス科の野菜を中心にアルファルファやワタなど数種の植物に萎ちょうを引き起こす重要な植物病原菌である。この病原菌の生理，生態，防除方法や植物の抵抗性などを論議する場である国際バーティシリウム菌シンポジウムは4年に一回開催されている。前々回はカナダのゲルフ大学で，前回は旧ソビエト連邦のレニングラードで開催されており，今回はイスラエル死海沿岸のエンボケックで開催された。ロンドンを経由してイスラエルのベングリオン国際空港に18日に到着した。この空港は日本人過激派が銃を乱射した旧ロッド空港で，何となく入国第一歩の印象は重苦しいものだった。しかし真っ青な空の下に迎えの人がうろつく空港は，このような印象を打ち消してくれた。空港からはタクシーの相乗りで，テルアビブのホテルに向かった。次の日（19日）の朝，ホテルから死海沿岸行のバスが出た。空港経由で一路死海沿岸まで移動するものと思っていたが途中エルサレムの見学が加わった。「聖地エルサレム」という言葉を思い浮かべながらたどり着いたところは，ほとんど草木の生えていない城壁都市とおぼしき丘という印象だった。街門の至る所に自動小銃を持った兵士がうろろうろしていたが，それよりも，バスを降りてエルサレムの街をガイドしていたシンポジウムの幹事の Dr. Nachimias（イスラエル農務省）の腰に，ピストルがあるのを発見したときの驚きのほうが強烈であった。夕方死海のほとりにあるホテルに無事到着したときはほっとした。チェックイン後，同行の長尾先生（千葉大）と死海で「浮遊」を楽しんだ。

今回のシンポジウムは4つのセッション（Pathogen, Epidemiology, Resistance, Control）と「*Verticillium* 菌研究における分子生物学の役割」というワークショップで構成されていた。開催日

初日の夕食後にワークショップが行われた。Dr. Heale (King's College) は分子生物学からの情報の優れた点を積極的に採用することを提案した。

シンポジウムの発表では分子生物学的手法による研究の進展がみられ、この結果は次の2点に要約される。第一点は、RFLP (Restriction Fragment Length Polymorphisms) や RAPD (Random Amplified Polymorphic DNA) などの異なる分析手法を用いた場合、半数体と倍数体の *Verticillium dahliae* と *V. albo-atrum* は、それぞれいくつかのクラスターに分類された。第二点は、*V. dahliae* と *V. albo-atrum* のそれぞれの VCGs (Vegetative Compatibility Groups) のグループと RFLP のグループが対応することである。今後、病原性にかかわる酵素群のアイソザイムや特定の遺伝子によるグルーピングが展開されれば、*Verticillium* 菌の病原性の獲得あるいは寄生性の分化について、さらに研究の深まりが期待できそうである。

自分にとっては、無事に発表できたことよりも、論文でしか名前を知らなかった米国、英国の大家の先生方に可愛がっていただけたことのほうがうれしかった。このような貴重な経験に支援を賜った帯広畜産大学後援会に感謝を表わすものである。

なお今回のシンポジウムについては、著者と同行の長尾先生との共著で、植物防疫 48 巻(505-508 頁、シンポジウム全般について)と日本菌学会報 35 巻(229-231 頁、分類について詳細に)に報告済みである。興味のある方はこれらを参照していただきたい。